

『淫獣の楔 -生贄の花嫁-』

著：西野 花

ill：笠井あゆみ

ああ駄目だ、と思った。

もうじき自分は意識を奪われてしまう。そして次に目を覚ました時は、おそらく死んだほうがましだと思うような目に遭わされるのだ。誇りも矜恃も、何もかもを踏みにじられるような。

————それくらいなら。

水葉は小刀を握る手に力を込めた。

それくらいならいっそ、今ここで自分の命の始末をつける。

「ギャッギャ————」

耳障りな声を上げて小鬼が躍りかかってきた。水葉は小刀の刃の切っ先を、自分の胸へと向ける。

次の瞬間、小鬼の姿が消えた。正確には、黒い霧となって消滅した。まるで、何者かにかき消されてしまったように。

男は顔いっぱい疑問符を浮かべている。ということは、男が消したのではないのだろう。

「————久方ぶりの現世に来てみれば、さっそく荒事か。なかなか楽しめそうだな」

聞いたことのない男の、張りのある声その場に響く。

「さて、私らのご主人様にちょっかいかける奴はぶっ殺さないかね」

もう一人、先ほどと比べ少し柔らかい、けれど言葉の内容は物騒な声が響く。気がつけば、水葉の目の前に二人の男が立っていた。どちらも背が高い。後ろ姿しか見えないが、どこか昔風の装束を着ていて、一人は黒髪、もう一人は赤褐色の髪色だった。その気は猛々しく、明らかに人ではない。

「お————お前達は!？」

「お前がさっき言ったのだろう。『魔獣』だとな」

「そ、そんなはずはない。小桜には魔獣はもういないと」

男が慌てたように言った。

「誰がそんなこと言ったのさ。いるって。そりゃあ、時にはここを抜け出して遊びに行くこともあるけどね」

「帰ってみれば呼び出しがかかっていた。————すまなかったな。待たせた」

その時、黒髪のほうが振り返り、続いて赤褐色の髪の方はこちらを見た。

「————」

水葉は目を奪われる。

彼らは自らを『魔獣』と言った。それでは、水葉が封印を解き、目覚めさせようとした荒神は

彼らなのだ。

「約定に応え、お前に俺達の名を授けよう。俺は矢斬」

「私は火月。よろしくね」

矢斬と名乗った魔獣は、男らしく端正な顔立ちで、荒削りな色香さえ漂わせている。やや癖のある黒髪を無造作に後ろに流していた。頭の横に、獣の耳のような毛束がある。これが人間の男だったなら、さぞかし女性が熱を上げるだろう。そんな危険な魅力があった。

そして火月と名乗った方は、肩を越すウェーブがかかった赤褐色の髪をしていて、どこか女性的な雰囲気をも漂わせていた。だがやはり整った顔立ちはどう見ても男性のもので、矢斬ほどではないが体格もしっかりとしている。神にもこういった者がいるのだと思わせるような、風変わりな出で立ちだった。火月もまた、頭部の左右に獣の耳のような毛束がある。

「長い間主人がいなかったとあっては、まだ十分に力を発揮できないだろう」

それまで黙って三人の話を聞いていた男は、腕で空中に新たな印を切る。すると、先ほどとは明らかに質量の違う、凶暴な気が辺りに満ちた。空間が歪み、そこからズズ…、と、新たな異形が姿を現す。

(———大きい)

先ほどの小鬼とは比べ物にならなかった。少なく見積もっても二メートルはゆうにあるだろう。頭が牛を思わせる形をしていて、ねじれた角が生えていた。

「そんなひよっこでは思うように力を奮えまい。魔獣達よ。どうせならこちら側につかないか？ そんな未熟な主人に仕えていても仕方がないだろう」

「……っ」

男の言葉に、水葉は唇を噛む。『鍵』の使命を宿して生まれてきた以上は、修行はしてきたつもりだった。だが、こんな時に戦う力がない。自分の役目は別にあるとは言え、守られるだけというのは歯がゆいものだった。未熟とそしられても仕方がないのかもしれない。

だがそれは、水葉には屈辱的なものだった。

「お前にはこの魔獣達は扱えない。小桜の正統な当主の血を引き、なおかつ『鍵』である俺でなければ」

そんな言葉が思わず口をついて出た。そうだ。もう父はいない。これからは自分が、小桜を背負っていかねばならないのだ。

そんな水葉に、魔獣達はおや、という表情を浮かべ、互いに顔を見合わせる。そして男はと言えば、そんな水葉をははっ、と笑い飛ばした。もはや最初の慇懃な態度もない。

「若いというのはいいものだ。自らの実力も知らず、いい気になっていられる」

男が喚び出した牛鬼が、ずん、と歩を進めた。その威圧感に、水葉の背が微かに戦慄く。

(怖いものか。怖くなんかあるはずがない)

怯んだ様子を見せれば、魔獣達はたちまち水葉を見限るだろう。今の水葉は、魔獣達に命令を下し、この男と牛鬼を退けなければならない。

「———矢斬、火月、牛鬼と、その男を倒せ」

「それは命令か？」

「もちろんだ。そのためにお前達を目覚めさせたのだから。だからその男の甘言に乗ることは許さない。俺に名を名乗ったのだから、これからは俺のために動け」

あえて高圧的に宣言すると、矢斬がふっ、と笑った。

「なかなか可愛いご主人様じゃない？ 気に入ったな、私」

「めずらしく気が合ったな。俺もだ」

魔獣達が、揃って前に出る。次の瞬間、牛鬼の咆哮が洞窟の中に響いた。その巨体には見合わない速さでこちらに突進してくる。

「————！」

水葉は思わず息を呑んだ。

彼らは無造作に片手を前に出す。それはまったく力みのない、軽い動作のように水葉には見えた。

だが次の瞬間、牛鬼の胴体に大きな穴が開いた。

「え」

「なにっ…!？」

水葉よりも、牛鬼を出した男のほうが驚愕の声を上げる。牛鬼の動作が止まり、それからゆっくりと身体が傾ぐ。巨体が地面に倒れる寸前で、さきほどの小鬼と同じように、黒い霧のような塵となって消えていった。

「————準備運動にもなりやしない」

火月が肩を回して呟く。

「同感だ」

続ける矢斬もまた、まるで何もしていないように見えた。

水葉は口の中が乾いていくのを感じる。彼らはあまりにも戦うことに特化しているように見えた。もしも扱いを誤れば、おそらく取り返しのつかないことになるだろうということも。

————だがそれは、すでに覚悟の上だった。

水葉は彼らの力の煽りをくらって倒れている男を見やると、魔獣達を押しつけて前へ出る。

「答えろ。お前はいったい何者だ。どこから来た」

男は口から血を流したまま、皮肉に笑った。

「いずれわかる。この世に混沌を呼び込み、制圧するために、我らは動くのだ」

「そんなことをして何の意味がある」

水葉の声が怒りで震えた。父は、その混沌とやらに殺されたのだ。水葉は、ここで自らの手で男にとどめを刺し、父の敵を討ちたいという感情と懸命に戦っていた。水葉は幼い頃から、自らの感情を完璧にコントロールしろと教えられてきた。『鍵』を宿す身として、衝動に身を任せるのはあまりに危険だからだ。けれど水葉は、それがうまくできない。つい気持ちを抑えられない時があって、その度に父に叱られていた。けれど叱ってくれる父は、もういない。

「お前は術者だろう!? 術者であればこそ、この世の理と平安を守らねばならないはずだ。それなのに何故…！」

魔鬼は本来人に使役できるものではない。その本能は殺戮と凌辱に占められ、人の言うことを

聞く余地などないはずだ。だが、それらを使役し、しかもその力を他者に与えられる者がいる。

「————その平安を、不要だと思う者もいるというだけだ。時が来たのだよ。腐りきった安寧を覆す時だ。その魔獣どもは確かに強力だが、時代の流れには逆らえまい」

水葉は魔獣達を振り返った。彼らは、つまらなさそうな顔で男と水葉のやりとりを眺めている。まるで自分には関係ないとでも言うように。

「————この世は人間だけのものではない。鍵を宿したお前は、これよりその肉体をあらゆる魔鬼から狙われるだろう」

「————…っ」

『鍵』として、水葉が使える力は三つある。ひとつは、黄泉の世界とこの世を繋ぐ門を開ける役割としての力。ふたつ目は、魔獣を目覚めさせ使役する力。そして三つ目は、未だ水葉の肉体の中に眠るものだった。

水葉は魔獣の封印を解いてしまったために、あの世とこの世の間にある世界に、淫獄にアクセスしてしまった。それがきっかけとなって『鍵』としての存在が活性化し、魔鬼達にとっての上なく芳しい匂いを放つようになる。それも教えられてきたことだった。

「せいぜいあがくんだな…、あの世から、見ていてやるよ……」

男はそう言って事切れた。

水葉はしばらくその屍を見下ろすと、ゆっくりと背後の魔獣と呼ばれる神に向き直った。

猛々しくも美しい、力強いその姿。見ていると何故だか胸がざわつく。

「お前が俺達の主人だ。相違ないな」

「もちろん」

毅然とした態度をとろうと努めるも、今の水葉には正直自信がなかった。さきほどは使役者としての自覚を促すため強い言葉を使ってしまったが、あれはその場の勢いのようなものだ。また己の衝動に流されてしまったと、思わず自省する。

水葉はまだ若い。この間成人したばかりだ。当主としてはもちろん、術者としても未熟者で、圧倒的な力を持った目の前の獣の神を使役できるのかという気持ちにすらなってくる。

だが、やらなければならない。

父は水葉にすべてを託したのだ。『鍵』としての役目を負っている以上、この世の命運が水葉の肩にかかっているといってもいい。表の世界で生きる人間達は、まだ何が起こっているのか気づいていないだろう。だがこのまま敵の好きにさせていれば、いずれ一般の世界にも影響が出てしまうだろう。それを防ぐのも、水葉の役目だった。

「そんなに深刻な顔しないでよ。こっちまで滅入ってしまうじゃない」

火月が相変わらずの独特な口調で言う。

「まだまだ頼りない主人だな。そんな様子で自分の身が守れるのか」

「そのためにお前達がいるんだろう」

凶星を指されてしまって、水葉はつついっけんどんな調子で返してしまった。内心でしまった、と思いながら。言われた矢斬はまったく気にしたふうもなく、口の端を上げている。

「いいじゃない。なかなか気が強い可愛い子で私好みだわ」

「可愛いのは同意だが、薄紅の生まれ変わりとは思えんな」

矢斬の言った薄紅という名前に、水葉の口元が引き締まった。

小桜家の歴史は、とある強力な術者から始まる。薄紅という名のその術者は、元々は白拍子であつたらしいと聞かすが、卓越した力を持っていたという。まだ荒魂であつた矢斬と火月を調伏して使役し、その当時に現世に蔓延っていた魔鬼達を退けて黄泉の国へと送り返した。

そして薄紅は自らを鍵とし、その力を後の世に伝えることになる。

いつかまた、黄泉の門がこじ開けられそうになる日が来ると、薄紅は再びこの世に甦り、その役目を果たす。その時に力を貸すのが、この矢斬と火月の魔獣達だ。

「薄紅って、どんな人だったんだ」

「そうねえ…、一見大人しそうだったけど、実際はとんでもなかったわね。あそこまでポコポコに殴られたのは初めてだったもの」

「ああ。奴は俺達を完璧に支配していた」

そんなふうに言われると、まるで今の自分と比べられているようで、水葉は居心地の悪い気分になる。小桜の始祖とも言うべき術者と未熟者の自分では、実力に隔たりがあつて当然だ。恥に思うことはないのに、水葉にはそうできない理由がある。

水葉が薄紅の生まれ変わりだということだ。

実感があるかと問われれば、あまりないと答えざるを得ないだろう。

けれど水葉には、幼い頃から繰り返し見る夢があつた。

どこかの山の中。自分は誰かと一緒に戦っている。それは二頭の獣だつた。巨大な犬と猫のような姿をしたそれは、水葉を守り、周りを囲む敵をなぎ倒していく。その獣達と一緒にいれば、まるで負ける気がしなかつた。

あれは記憶なのだろうか。水葉は生まれてから、お前は薄紅という祖先の生まれ変わりなのだとと言われて育つた。自らを『鍵』とした運命を引き継ぐ存在なのだと。

そう言われて、最初は困惑したのを覚えている。遠い祖先の魂を引き継いだと言われても、自分は自分でしかないからだ。もしも自分がその薄紅という存在と同じなのだとしたら、今ここにいる水葉は何だというのだろうか。目の前の自分に従うという魔獣達もまた、薄紅と水葉を同一に見ているのだろうか。

胸が、きゅっと痛むような感じがした。自分はいつも、偉大な始祖と比べられていた。

だが、やらなきゃ。

水葉の意思はどうあれ、自分は役目を背負って生まれてきてしまった。人は誰しも役割から逃れることはできない。水葉しかそれが成せないというのなら、やるしかないだろう。

「…俺が未熟な主人だというのは認める。仕えがいが無いというのなら我慢してくれと言うしかない。それでも、俺が『鍵』として生まれてきた以上、お前達には俺を護る役目がある。約定を果たしてくれ」

強がりながらも、水葉は魔獣達に向かって頭を下げた。自分よりも遥かに上位の存在に対して敬意を表しつつも、上下関係をあやふやにしてはいけない。これも、父から厳しく言われていたことだつた。

「…あのねえ、そんなの、言われなくともわかってるって」

火月の軽い口調に、思わず頭を上げる。

「私達、薄紅の魂には逆らえないからね。あんたが『鍵』だってのは私達にはわかる。心配しなくとも、ちゃんと仕事してあげる」

「…っ本当か」

「少なくとも、覚悟だけは出来ているようだからな」

矢斬にもそう言われ、水葉は少しだけ安堵した。これで魔獣達の力を借りることが出来る。

「では、契約の儀といこうか」

「え…？」

水葉はきょとんとした。契約の儀？ そんなことは父からも聞いていない。何か、やることがあったらうか。戸惑っていると、ふいに矢斬が距離をつめてきた。思わず身体が固まる。すると次の瞬間、顎を掴まれ、上を向かされた。

「……っ」

唇が重ねられる。口づけをされているのだ、とわかるまでに、数瞬かかった。それは水葉にとって、初めての行為だった。

「ん、う」

———思い出した。

古い文献を読んだ時に、そんなことが書いてあったような気がする。

水葉は魔獣達の力を借りる代わりに、その身を捧げなければならない。白拍子でもあった薄紅は、自らの肉体でもって魔獣達の荒ぶる魂を鎮めたという。だから水葉も、薄々覚悟はしていた。だからこれが、契約の儀というわけか。

矢斬の舌が水葉の口内をゆっくりと舐め上げていく。奥で縮こまろうとする舌を捕らえられてしゃぶられると、鼻から抜けるような声が出た。喉が上下して、送られる唾液を呑み込む。不思議と嫌悪感はなかった。膝から力が抜けていって、かくん、と折れそうになると、矢斬の力強い腕が腰を支える。ようやく唇が離れると、水葉ははあっ、と熱い息を漏らした。

「…ふ、初なのも可愛いな。この場で食ってしまいたくなる」

それは言葉通りなのか、それとも別の意図があるのか、と呆けた頭で考えると、反対側から腰を引かれ、次の瞬間には火月の腕の中へ収まっていた。

「私にも水葉の唾液味わわせてよ」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>